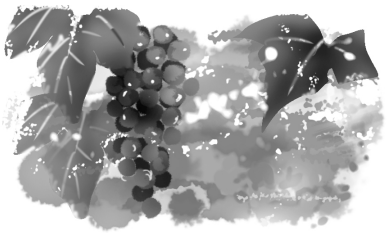
宮坂静生推薦　岳　10月

すぐ変はる強気弱気や敗戦日　堤　保徳
黄昏に妻の声聴く秋成忌　満田光生
盆綱引果ててしまへば風岬　大野今朝子
夏さぶとわたつみ紺を深うしぬ　松本よし乃
綿菅のほぐるる穂綿自由とは　久根美和子
紫蘇もむと情死とげたる如き色　田中純子
水分の空をおはぐろ蜻蛉舞ふ　須田奈津子
炎天や毛皮ファスナー脱げぬ猫　細川はじめ
一紺の天と繋がる鉾頭　丸山貴史
刑場の屍のごとし捨て夕顔　今井愛子
総身に月光かぶと虫のぼる　田村道子
みちのくの祭に夜空寄り添ひぬ　滝澤あや
盆の月ぽんと突いたら笑ひさう　小宮山秀子
流燈の一つに一人被曝の子　市川美八子
烏山和紙まみどりに山あげ祭　西村美枝



*

苛つ世や西瓜落としてしまひさう　鈴木臣和
栗の花土偶に稚の声幽か　名取朋子
朝顔や昨夜の事は水に流す　島形英美子
飼葉切る菩薩と同じ汗をかき　柏田浪雅
初浴衣母の背中に見え隠れ　山田勝文
十勝野の麦の切株空渡る　大澤淳基
草舟に乗る訃がひとつ秋の水　渡邉樹音
夏果つる混沌として曠野あり　横地妙子
水中花和らぎをりぬ水は夫　原田宏子
父の叱咤母の抱擁百日紅　石田経治
水切りを子に見せてゐる敗戦日　佐藤由美
青柿や人生未だ六合目　加瀬ひろし
向日葵を担ぎ込んだり田沢湖線　佐藤映二
炎天や句会へ急ぐ老女たち　飯村弘子
夏野馳ける馬の化身か夫の逝く　大澤冨久子

岳俳句・拓くことば　十月

458

宮坂静生

はじめに。一句を机の前でまとめ上げるのはむずかしい。二段階方式はどうか。吟行をしたり、日常のスケッチをしたり、少しでも見た・聞いた・感じたというメモ俳句をもとに、二、三句を一句にまとめる。まとめるのは机上でよいが、もとのメモ俳句をしっかりと充実させる。句帖も二冊。メモ俳句用が一冊、まとめ用が一冊。まとめ用には「岳」句帖を。

強気弱気――日常の生のことばを生かす

すぐ変はる強気弱気や敗戦日　堤　保徳

なぜ敗戦日なのか。戦中は強気、戦後はころっと弱気という軍人やインテリや教師などの例を知っている。庶民は翻弄されるばかりであった。近くはどこかの国の大統領の例もある。上掲句は自分のことを省みたもの。これではダメだと自戒したのである。気持をしっかりさせることは至難である。

黄昏に妻の声聴く秋成忌　満田　光生

秋成は怪異譚「雨月物語」の作者上田秋成。文化六年（一八〇九）六月二十七日逝去。夕方を「誰そ彼」（黄昏）という。一日のうちのふしぎな刻。そのときに亡き妻の声を耳にした。若くして逝った妻を思う痛切な思いがどこか幻覚のように詠われる。文人光生のかなしさが伝わる作。

盆綱引果ててしまへば風岬　大野今朝子

南九州から沖縄にかけて盆綱引の行事が多い。沖縄の盆の地貌行事として、島をあげて雄綱、雌綱の結い上げから始まる。終われば秋色ひとしお。「風岬」がいい。暮しにメリハリをつける。ダラダラではない。それが歴史のリズムになる。大どかな暮しのうねりを捉えた句として印象に残った。

夏さぶとわたつみ紺を深うしぬ　松本よし乃

「夏さぶ」は夏らしくなること。夏に入りいちだんと海が紺を深くした。意味を捉えるとそれだけのことであるが、ことばのひびきは意味よりも深くまで読み手を誘う。この海に幾万という人がいのちを捧げたことか。「わたつみ」の一語が、生者ばかりでなく、亡き人への思いを蘇生させる。一句は意味を超えた域まで届いてはじめて作品となる。

綿菅のほぐるる穂綿自由とは　久根美和子

私の好みからいうと「穂絮」。結句の「自由とは」はなんと勝手気ままなことよと、そのさみしさを滲ませたもの。綿菅は好きな方へどこまでも飛んでいく。それによって植生が拡がる。それに比べて人の世はと、人間界の不自由さをどこかで思わせたものであろう。どうぞ自由におやりくださいとは、相手を縛ることになる決まり文句でしょうね。

紫蘇もむと情死とげたる如き色　田中　純子

紫色を情死の死斑の色とみたもの。信州などでは、漬梅に紫蘇を入れる。それをもんだ色からの連想が妙に日常的で実感を伴う。気持のいい連想ではないが、ちょっと古風さが幼児期の体験などからの思い付きと思わせる。気になっていることを詠うのはいい。詠って詠って、詠うことが自分のうちになくなる。そのときにどんな句ができるか、これが愉しみ。詠うことがなくなったという声をしばしば聞く。それは本当かな？　それほど詠い尽くした人はまだいないと思う。

水分の空をおはぐろ蜻蛉舞ふ　須田奈津子

分水嶺にあたる地が水分。おはぐろ蜻蛉は夕方に水辺を漂うことが多い。掲句の空といっても、そんなに高くない地であろう。水辺とおはぐろ蜻蛉でなく、水分の空との取り合わせが珍しいとみた。吉野の水分神社は名高い。こゝは信州あたりの水分か。木曾の鳥居峠も水分の一つ。

炎天や毛皮ファスナー脱げぬ猫　細川はじめ

暑中の猫の毛皮をまとった暑苦しさに同情した作。獣は夏が大変。脱ぎたくても脱げないあわれ。

一紺の天と繋がる鉾頭　丸山　貴史

祇園会の鉾の巡行詠。単純明快。絵巻物のような世界の中にいると、夏の青空もどこか作りものめいてみえる。自然が芸術を模倣したようだ。都会人の目は今日、みんな自然を自然のまゝに見ることができなくなっている。素朴な自然はつまらないと思ってしまうのである。

今月の秀句

流燈の一つに一人被曝の子　市川美八子

送り盆の灯籠流し。その中の一つが被曝した子のものだという。被曝した子が流していると受けとれないこともないが、流燈云々とあれば死を前提にしたいゝ方と読める。あるいは、複数の被曝の子か。広島・長崎の体験者詠はすでに多く詠まれている。が、原子力災害が世界でも日本でも問題になっている近年、新たに上掲の句が詠まれた意義を噛みしめてみたい。眠れる獅子のような作者の奮起が期待される。

拓(ひら)くことば ㉝ 自句寸言⑰「朴の中」

まつすぐに降る春の雪朴の中　昭和54年

「岳」（第九号・昭和五十四年六月）所載。「軽井沢・武郎終焉の地」と前書。軽井沢が好きで、よく行った。三笠の有島武郎別荘浄月庵跡地に佇む。大正十二年六月九日、波多野秋子との情死のことなどを当時「白樺」編集長であった伯父の宮坂栄一から聞いていた。最後に遇ったのが自分で、高村光太郎の彫刻「指」を貰い、「よき編集者は書き手に勝る」といわれたとの由。その前年、北海道の有島農場を小作人に開放するなど、武郎が苦悩に率直に立ち向かった態度に私は共感していた。「まつすぐに」は雪ばかりではない意を籠めた。神尾季羊が褒めてくれた。『樹下』所収。

闇に出て神楽狐の貌冷やす　昭和55年

「岳」（第十三号・昭和五十五年二月）所載。前年十二月半ばに、霜月祭に行った。木曾にある林業大学校の市川圭一校長に誘われ、同僚の哲学教授水野清志先生と一緒だった。飯田から入った上村(かみむら)の木澤集落の神社が会場。宿で鹿の肉を初めて食べ、体を温めてから行き、一晩中素朴な踊りを見る。夜明け近く、狐の面を付けた踊手がはあはあ言いながら闇に狐面を冷やしていた。後に同じ下伊那新野(にいの)の雪祭(ゆきまつり)や、盆には和合(わごう)の念仏踊を見た。が、始まりは霜月祭。印象強烈だった。飛騨高山の冬頭屋(ふいとうや)に市川先生と泊まり、朝市を巡った。翌五十六年には頼まれて林大の校歌「みどりなす夢」の作詞をした。あの頃からの先生では京都在住只木良也（名大名誉教授）先生だけが健在である。『樹下』所収。

砂川へふたたび塒(とや)の梅雨穴(つゆあな)　昭和55年

「岳」（第十六号・昭和五十五年八月）。同時作「さむい七月自転車の紐たらし」「あすひらく泰山木が族境(まけ)」がある。昭和三十三年八月、第二回原水爆禁止世界大会に信越地区学生代表として砂川に来た日を思い、二十年ぶりに尋ねた。欅並木は変わらない。が、基地闘争の頃の面影はない。農家の鶏小屋の根に穴がある。寒い夏だ。感動など一切ない。殺伐と平凡。あれは何であったかと淡々と歩く。泰山木が目に付いた。『樹下』所収。

萩寺やみみずむかでへ灯のひとつ　昭和55年

「岳」（第十八号・昭和五十五年十二月）。大谷大学での俳文学会の前日、十月十七日、成城大学大学院生小澤、満田、宮脇、早川君らと奈良新薬師寺に泊まる。その折の嘱目。山下一海先生との出会いも思い出される。小暗い灯に旅のわびしさが滲み、新鮮だった。『樹下』所収。

刑場(けいじょう)の屍(かばね)のごとし捨(す)て夕顔(ゆうがお)　今井　愛子

原句の「ごとよ」でなく「ごとし」がよい。夕顔の時期は短い。かんぴょうにも使えない夕顔は手を付けないで畑にごろごろ転がされている。「刑場の屍」の直喩がすごい。西瓜も冬瓜も同じ。アウシュビッツなどの戦中戦後の刑場か。

総身(そうしん)に月光(げっこう)かぶと虫(むし)のぼる　田村　道子

月下のかぶと虫が木をのぼる景。完璧すぎるところがあるが、童画のイメージに仕立てたもの。なぜこのような完璧さを求めるのか。どこかに自然との一体感、アニミズム的な原始社会への体質的な憧れがあるのであろう。

みちのくの祭(まつり)に夜空(よぞら)寄(よ)り添(そ)ひぬ　滝澤　あや

みちのくの「夜空」の重厚さを讃えている。ねぶたにしても竿燈にしても、支えているのは夜空の大いさや深さ。夜空は無限。夜空に比べたらねぶたも竿燈も人工のパフォーマンスにすぎない。寄り添うというやさしさがいい。風土に愛がある。

盆(ぼん)の月(つき)ぽんと突(つ)いたら笑(わら)ひさう　小宮山秀子

旧暦の盆の中日は満月。大きな手でぽんと突いたら、にっこり笑いそうだという。盆の満月の美しさに感嘆したもので、格別に凝った作ではない。満月に亡き夫のやさしさを感じている。作り手はさようにに、勝手な思い入れをするがいい。

烏山(からすやま)和紙(わし)まみどりに山(やま)あげ祭(さい)　西村　美枝

那須烏山の山あげ祭詠。珍しい地貌季語を生かしている。大通りに移動歌舞伎の舞台の背景（山あげ）を地元の和紙をふんだんに使って仕上げる。大山(おおやま)・中山(なかやま)・前山(まえやま)・館(やかた)・橋(はし)・波(なみ)などが並ぶ。ときは真夏の七月下旬。写真家らしい着眼が光っている。

土偶に稚の声をきく幻視

栗(くり)の花(はな)土偶(どぐう)に稚(やや)の声(こえ)幽(かす)か　名取　朋子

土偶の貌のあどけなさ。稚というには腹も尻も大きい。妊婦のようだ。が、声を出せば意外にも稚の声かもしれない。花栗の体液のようなにおいから水子の稚の声を蘇生させるとはなかなか思いが深い。土俗の深みを捉えようとしている。

朝顔(あさがお)や昨夜(さくや)の事(こと)は水(みず)に流(なが)す　島形英美子

「昨夜の事」とはなにか。なにか重大なことを話し、一夜明けた。「水に流す」とはなかったことにするのであるが、痕跡をとどめない処理の仕方。が、どこか古来の日本風。朝顔との取り合せは平凡であるが、「水に流す」の俗な諺との照応はおもしろい。新しい朝を出直しのときだ。

飼葉切る菩薩と同じ汗をかき　柏田　浪雅

働き者の牛飼いが菩薩と同じ苦労をかさねているという。自分のためではない、他のために働く。それは偽善だという今日の歪んだ考え方を正すまじめさが一句には流れている。一本気な生き方であるが、正当に評価する社会であってほしい。早々世に容れられないことはわかっているのである。

初浴衣母の背中に見え隠れ　山田　勝文

はじめて浴衣を着せて貰う。幼児のあどけなさを捉え、ういういしい。ほっとする。幼き日の回想にもつながる幸せな光景を描き、俳句初心の明るさも漂う。

十勝野の麦の切株空渡る　大澤　淳基

「空渡る」とは飛行したとも受け取れる。上空から見た十勝一望の麦刈りが終った後の光景か。他方、晴れわたる表現とも。いずれにしても十勝の大景にどかっとした安堵感がある。「切株」への着眼は開拓から始まった十勝野の真髄を突いている。切株は拓地の象徴だ。

草舟に乗る訃がひとつ秋の水　渡邉　樹音

かなしい句だ。名もなき民の死。澄んだ秋水も自然へ還るたましいのあり処を暗示しているようだ。

夏果つる混沌として曠野あり　横地　妙子

釧路在住の作者。北海道北東部の大原野を前に、よく大景に敗けないだけの意欲の充実がある。北国はいわば二季。夏が終わると一気に秋色に向う季節の変り目に思いも深い。「混沌」が生きている「曠野」とは北海道の他にはない。

水中花和らぎをりぬ水は夫　原田　宏子

亡き夫が水中花を生かす水になって身近にいてくれる。寡黙で互いにわかり合った夫婦であったのであろう。夫恋の句としてささやかな一句。そっと記憶しておきたい。私を水中花に見立てたところも万事控え目の作者らしい。真実はもっと底力あり、頼りになる。

父の叱咤母の抱擁百日紅　石田　経治

草田男の「萬緑」の後継ぎ「森の座」（横澤放川）でも活躍している作者。上掲句も草田男風、知的な諺的な捉え方だ。そこに説得力がある。いささか常識的な見方であるが、百日紅が彩る日常の暮しはこんな父と母の愛情に包まれている。日常のモラルが曖昧な昨今、ときに常識が光るものだ。

水切りを子に見せてゐる敗戦日　佐藤　由美

敗戦日の混沌たる気持を持ちながら、子に「水切り」を見せている父親像。七十二年前の陰画とも読める。現代であっても、戦の気配が内外ともに現実味を帯びているときだけに、こんなスナップの一句にも平和の尊さを感じるものだ。

青柿や人生未だ六合目　加瀬ひろし

当年八十歳の作者。私も同じ世代。半分は過ぎたであろうと思っていたときだけに、はは六合目かと私も同感した。富士を目指せば、いよいよ胸突八丁（約九百メートル）を容れ、急な山道が続く。房総銚子の作者。気合が入っている。

向日葵を担ぎ込んだり田沢湖線　佐藤　映二

盛岡から秋田へ向う田沢湖線。小岩井牧場の駅がある処。刈った向日葵の大束をどっと担ぎ込むスナップ風景が新鮮。生な現実が持ち込まれ、一句がいきいきと輝いている。

今月の秀句

苛つ世や西瓜落としてしまひさう　鈴木　臣和

日常身辺のさりげないことに苛立ちを関連させたおかしさ。表現は軽いタッチでありながら、内容は深い。つぎつぎと世の不安をあおるような法案を成立させ、昭和戦前の暗い世相を知っている者には、苛立ちを感じさせるばかり。ひとり考えながら歩いていると、手にした大玉の西瓜を道に落としてしまいそう。しばしば幻想する。この西瓜を落としたら爆弾のように四方に飛び散るだろう。どうしようどうしようと。

夏野馳ける馬の化身か夫の逝く　大澤冨久子

壮健な夫だったのではないか。夏の野を自在に駈け廻る馬に亡き夫の姿を重ねた素朴さが胸を打つ。あれこれ思いを描くのが夫への最高の供養である。

炎天や句会へ急ぐ老女たち　飯村　弘子

「老女たち」の句が登場。時代は急速に老女たちの時代へ。若者たちもいるが、いまや老女たちが元気。寿命百歳が珍しくない高齢社会に入っている。炎天下、今日は句会と足早にゆく老女たち。さしずめ九十歳代。八十歳代は老女見習い。七十歳は子ども。五、六十歳は人間になりかけたばかり。

画架据うる老人たちの夏木立　小宮山秀子

「老人たち」が時代のパワーになっている。老いこそ日々新しく。そんな風に生きたい。

岳集推薦候補作を掲げる。

樺忌に隣る月日や夜の蟬　石田由美枝
短夜の夢に逝きたる誰も彼も　佐伯　千年
町工場減る葛飾の蓮かな　志村寿美代
海鳴や空蟬何を待つ構へ　日立　早
夕霧のさりさり迫る舟着場　早乙女　翠
風鈴の舌に記したる反戦歌　那須野次則
向日葵の木となりすずめ懐き来る　佐々木重昭